



Title	「から」「ので」「て」: 日本語の原因・理由を表す表現について
Author(s)	山下, 好孝
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 3, 1-14
Issue Date	1999-12
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/45574
Type	bulletin (article)
File Information	BISC003_002.pdf



[Instructions for use](#)

「から」「ので」「て」

－日本語の原因・理由を表す表現について－

山下好孝

要 旨

日本語の原因・理由を表す表現「から」「ので」「て」について、日本語教育の観点から考察を行う。まず「から」「ので」に関し、先行研究の成果を概観する。従来主張されてきた「主観的判断」「客観的判断」という規準を捨て、別の規準でこれらの表現を扱うべきことを主張する。

次に原因・理由を表す「テ形」接続文に焦点を当てる。先行研究を概観し、問題点を抽出する。「テ形」接続文の前件と後件を形成するそれぞれの述語の特性を明らかにする。原因・理由を表す「テ形」接続文の前件には動作性の低い述語が生起すること、及び、後件には感情表現の述語が生起することを主張する。それに伴い、従来、原因・理由の「テ形」接続文とされていたもののいくつかを再検討し、順次動作のテ形文に分類することを提案する。また、この表現に関連して行ったアンケート結果を示し、議論の妥当性を裏付ける。

〔キーワード〕 テ形、カラ、ノデ、文接続

1. はじめに

日本語の原因・理由を表す表現には「から」「ので」「ため」そしてテ形接続の一種である理由を表す「て」がある。このうち「ため」はあらたまった文体で使われる表現で、日本語の初級教科書には通常現れない。

本稿は、上記の接続表現のうち「から」「ので」「て」を取り上げ、その違いについて考察する。最初の2つ「から」「ので」に関しては多くの研究があり、その違いについては大方の決着が出ていると思われる。その成果をどのように日本語教育で取り上げるべき過、提案を行う。第2節では、「から」「ので」に関する主だった研究の要点をまとめる。

第3節では、原因・理由を表す「テ形」についてなされて来た研究のいくつかを検討する。そこで浮かび上がる問題点について、第4節で新たな

考察を試みる。結論として、前件には動作性述語が来にくいこと、後件には、「感情」を表す表現が来やすいことを主張する

2. 「から」と「ので」¹⁾

理由の「から」と「ので」の意味の違いについては、従来から「から」は主観的、「ので」は客観的に理由をとらえていることを表すという説が、広く流布しているようである。国広（1992）によると、国語辞典にもそのような記述があるものがある。

(1) 「三省堂国語辞典第四版」

ので（接助）理由・原因を（客観的）にあらわすことば。ために。

「しばらく雨が降らない_____ほこりがひどい」

から（接助）[主観的に]理由・原因をあらわす。

「雨が降る_____やめた」

そして日本語教科書にもそのような記述に基づく説明がある。An Introduction to Advanced Spoken Japanese よりの記述を見てみよう。

(2) *Kara* may express the Speaker's judgement.

寒いから窓を閉めましょう。

Note is not often used in command or interrogative constructions.

Incorrect 迷惑になるので静かにしなさい。

Correct 迷惑になるから静かにしなさい。

しかしながら、「ので」文の後件に命令が来る例文は多数報告されている。

(3) かけこみ乗車は危険なのでやめましょう。

さらに同書は

(4) A：昨日、行きましたか。

B：いいえ、風邪を引いたから行きませんでした。

いいえ、風邪を引いたので行きませんでした。

Note is preferable to *Kara* in this example, because *Kara* places emphasis on the speaker's personal point of view, sounding slightly self-defensive and therefore less polite than the more objective *Note*.

という説明を加えている。だが、そもそも「話者の判断」ということに「主観的」とか「客観的」というようなレッテルを貼ることは可能なのだろうか。「話者の判断」であるかぎりどちらも「主観的」にならざるを得ないのでなかろうか。

一方、国広（1992）はモダリティーを表す「のだ」のバリエーションとして「ので」という観点から、全く異なる結論を導き出している。

(5) ので： [[命題] 主観] (間接的)

から： [[命題] 客観] (直接的)

「から」を用いると一般的にぶっきらぼうな表現になることから見て、「から」は客観的とするのが妥当だと主張する。一方「のだ」はその間接性と主観性から丁寧な表現・柔らかい表現という性質を帯びることになり、敬意表現用の語ともなると言う。

ここでは「主観的」か「客観的」という観点から見て、完全に今までの説とは逆の結論を導き出している。日本語教育においては客観的か主観的かという説明を加えず、「から」は直接的に理由を表すので、丁寧さを出したい場合には「のだ」を使えという指導で十分ではなからうか。

つぎに、「から」「のだ」文の前件について考えてみる。

今尾（1991：84）は「から」と「のだ」の前につく要素によって両者の間に違いがあることを指摘している。まず主観性が強い推量表現「ダロウ」「デショウ」「マイ」などは、「から」文の前件の文には生起できるが、「のだ」文や「ため」文では、不可能であるとする。そして、前件の文に様々な語を付加して、前件の部分が情報の焦点になるかどうかテストしている。

	カラ	ノデ
(6) (1) 強意の副助詞「コソ」の付加	○	×
(2) 強意の終助詞「ヨ」の付加	○	×
(3) 疑問の終助詞「カ」の付加	○	×
(4) 疑似分裂分の変形	○	×
(5) 「ダ」による代用省略	○	×
(6) 埋め込み文に於ける主節	○	×

以上のことから、「から」文の前件は、情報の焦点になるけれども、「のだ」文の前件はそのような機能を担うことが出来ないと結論づけている。この点も日本語教育で留意しなければならない。

3. 「て」

成田（1983：140）はいわゆる「テ形」接続を四つに分類している。

(7) 副詞的用法：いすに座って本を読む。

継起的用法：図書館で勉強して、(それから) 家へ帰る。

原因・理由を表す用法：彼は驚いて、とびあがった。

並列的用法：おじいさんは山へ芝刈りに行って、おばあさんは川へ洗濯に行く。

そのうち原因・理由を表す用法で「テ形」には動作動詞は普通使われないと指摘している。だが、彼自身の挙げている例文は現在形に出来ないという性質を持っている。

(8) *彼は驚いて、とびあがる。²⁾

では、なぜ現在形では表現できないのであろうか。

(9) 隣がうるさくて、困ります。

隣がうるさくて、困りました。

のような文では、現在形でも過去形でも問題はない。とすると、「テ形」接続文の後件に何らかの制約があるのではないだろうか。結論的にいえば、(7)の原因・理由用法として挙げられた文は、「彼は驚いた」「彼はとびあがった」という二つの事態が時間的順序に生起したということを表している文で、副次的に原因・理由関係が読みとれるだけなのではないだろうか。動作動詞が前件、後件の述語として生起する「テ形」接続文は、しばしば分類が曖昧になる場合がある。

(10) 彼は椅子に座って、本を読んだ。(副詞的用法 or 継起的用法)

(11) 彼はおかしな物を食べて、医者に行った。

(継起的用法 or 原因・理由用法)

原因・理由を表す「テ形」接続文を考察する場合、後件の述語の性質も考慮しなければならない。しかしながら、成田氏の原因・理由を表す用法で「テ形」つまり、文の前件には動作動詞は使われないという指摘は非常に重要である。それは前件を否定形にしたばあいに「ナイテ形」ではなく、形容詞的变化である「ナクテ形」が現れることとも関係があろう。

(12) a. この漢字が分からなくて、困っています。

b. *この漢字は分からないで、困っています。

(13) a. 雨が降らなくて、良かったですね。

b. ?雨が降らないで、良かったですね。

次に滝井 (1998) を見てみる。彼女は、まず「テ形」接続を次の4種に分類する。

(14) (1) 順次：朝起きて、ご飯を食べて、会社に行きます。

- (2) 累加：東京は人が多くて、にぎやかです。
- (3) 付帯状況（「手段・方法」を含む）：傘を持って出かけます。
- (4) 原因・理由：手紙を読んで、安心しました。

高くて買えません。

そして、原因・理由を表す「テ形」文の前件と後件に述語について4つの観点から調査を行っている。ここでは前件の述語を述語1とし、後件（主節）の述語を述語2として、説明を加えている。

(15) 仮説

- (一) 述語1は主観性の述語よりも・状態・継続性の述語の方が自然な文となる。
- (二) 述語2は現在形であるというよりも過去形である方が自然な文となる。
- (三) 述語2は丁寧体であるよりも普通体である方が自然な文となる。
- (四) 前件の、後件の原因・理由と見なされる必然性の程度が高くなければ自然な文とはならない。

そして、アンケート調査の結果、以上の4つの仮説のうち、述語1が状態・継続性を帯びているかどうか、その他の要素よりも文の自然さに影響力を持っていることを示している。彼女が挙げているのは以下のような例文である。

(16) a. *タイから母が来て、デートできません。

b. タイから母が来ていて、デートできません。

この結論は先に検討した成田（1983）の主張と軌を一にするとも言えよう。しかしここでも彼女自身が原因・理由の「テ形」接続文として挙げている

(17) 手紙を読んで、安心しました。

の前件には動作性の述語が現れている。これはどのように説明されるのだろうか。また、後件を過去形に代えて

(18) タイから母が来て、デートできませんでした。

とすると、適格な文になる。この場合は、「タイから母が来たこと」「デートできなかったこと」という二つの事態が継起的に生じたという文だと認識されるからではないだろうか。するとこれは原因・理由を表す「テ形」文というよりは滝井氏の言う順次動作に分類されることになるだろう。

次に富田（1993）を検討する。富田（1993）は、原因・理由を表す「テ形」文の後件に、命令や意志性の強い述語が来ないことに注目した論考である。同じ性格が「と」を使った条件文の後件にも現れることから、両者を対照して教える教授法を主張している。

- (19) 「て」を使って述べた文が「と」を使って言い換えた場合に、全体的・通常的事柄として、それが言えれば、その「て」の用法は適当であるが、言えなければ、その場合は「て」ではなく「ので」を使って言うように指導したらどうか。

ところが、富田氏自身が認めているように、条件を表す「と」接続文では文法的でも、原因・理由の「テ形」接続文では非文となる文が存在する。

- (20) ここにお金を入れると、切符が出ます。

→

*ここにお金を入れて、切符が出ました。

さらに、後件に意志性が高い述語が現れているとして、非文と判断された文でも、後に示すアンケート結果に見るように多くの日本人に文法的だと判断されているものがある。

- (21) 昨日は雨が降って、どこへも行きませんでした。
(22) わたしは、今朝、朝寝坊をして、タクシーで来ました。

先に滝井氏の例文で考えたように、これらの文は過去に於ける2つの事態の順次生起を示すのだと考えられる。すると原因・理由を表す「テ形」接続文の性質自体を検討し直さなければならないこととなる。この問題については次の節で検討する。

ちなみに、これらの文は「と」接続文にすると非文法的になる。

- (23) *昨日は雨が降ると、どこへも行きませんでした。
(24) *わたしは、今朝、朝寝坊をすると、タクシーで来ました。

富田氏が主張するように、「と」接続文と「テ形」接続文には後件に命令や意志性の高い述語が来ないという共通点はあるが、それだけで両文を関連づけて日本語教育の場で教えるというのは無理があると思われる。

4. 感情を表す述語

この節では従来原因・理由を表す「テ形」接続文であるとされていたものの性質を考え直してみる。

原因・理由を表す「テ形」接続文の日本語教育に於ける指導に関しては、

以下のような説明が提案されている。

(25) 「新日本語の基礎Ⅱ 教師用指導書」

(1994, スリーエーネットワーク)

(...)動詞の「て形」に続く後件は、「びっくりする」「安心する」「心配する」「困る」「泣く」「笑う」「うれしい」「淋しい」「残念だ」などの感情の表現に関する表現に限る。また、い形容詞の「～くて」、な形容詞の「～で」の後件は、可能動詞の否定形や不可能の意味を表す「できない」「わからない」などに限ることによって「～から」との用法の違いを理解させる。(…)

(26) 滝井洋子 (1998)

〈既習の原因・理由の接続形式「から」との違い〉

- 前件と後件の間には、前件が先で後件が後に起こるという時間的前後関係がある。
- 前件がきっかけになって後件が引き起こされる。つまり原則として後件に話者の意志が 現れない。このことを学習者に理解させるために、後件を感情表現、(不)可能表現、迷惑受け身にはほぼ限る。
- したがって、後件には命令・依頼・勧誘・意志などの表現はあらわれない。
- 慣用的表現として「～て すみません／ごめんなさい／ありがとう」などの挨拶の表現を導入する。

いずれも後件には「感情表現」「可能動詞の否定形」等が現れ、意志性の高い述語が現れないことを指摘している。意志性が高い述語が生起しないということは、逆から見れば、意志性の低い述語が生起することになる。意志性の低い述語の中でも感情を表す述語が多いことはすでに指摘されている。

感情を表す述語の代表的なものは感情形容詞である。感情形容詞は、現在形で言い切りの平叙文では話者以外は主語に立たないことが特徴とされる。しかしながら、感情表現の典型である「欲しい」や「～たい」といったものは、原因・理由の「て形」とは共起しえない。そこには「話者の強い意志」というものが含まれるからである。

(27) a. *ケーキがおいしくて、もっと欲しい。

b. *ケーキがおいしくて、もっと食べたい。

c. ケーキがおいしくて、とっても幸せ。

したがって、ここでは感情表現を感情形容詞に限定せず、もう少し幅を持たせて考えてみる必要がある。

西尾 (1993) には次のような感情表現のチャートが挙げられている。

(28) 西尾の感情表現

動詞表現

- 1 (物音に) 驚く (一時的な気の動き)
- 2 (～を) 悲しむ (能動的な感情の動き)

形容詞表現

- 3 (～が) 怖い (感情状態の直接表出)
- 4 (～が) 恐ろしい (感情的判断)

動的



状态的

このチャートに基づいて考えてみると、「泣く」「笑う」などという動詞はかなり動作性の述語を形成するので、感情表現には分類されないことになる。その一つの証拠として意向形を持つということがある。

(29) a. 泣けるだけ泣こう。

b. もっと笑おうじゃないか。

感情表現はそのような意志性の高い形式にはなじまない。

(30) *心配しよう、困ろう、驚こう

また、「ありがとう」「ごめんなさい」といった表現は、まさに話者の感情を表現していると言えるのではないか。これらは原因・理由を表す「テ形」接続文と典型的に結びつくため、他の表現「から、ので、ため」等とは共起しないのである。

(31) a. 授業に遅れてすみません。

b. *授業に遅れたため、すみません。

c. *授業に遅れたから、すみません。

d. *授業に遅れたので、すみません。

動詞の可能形に関しては、原因・理由を表すテ形文の後件には否定形のみが生起するという現象がある。

(32) うるさくて、寝られません。

(33) *静かで、寝られます。³⁾

日本語で可能形は人間が主語になるときに限られる。可能形の否定形というのは、ある種の主観性を含み、感情表現の一種であると言えないだろうか。次の2文を比べてみると、その主観性の違いが感じられるであろう。

③4 a. 明日は来られません。

b. 明日は来ることが出来ません。

滝井氏が挙げられている「迷惑受け身」も一種の感情表現と見なすことが出来よう。

③5 あいつの話は巧みで、うっかりだまされてしまった。

以上の考察から、従来個別に挙げられていた「感情表現」「(不)可能形」「慣用表現」「迷惑受け身」などもすべて感情表現という範疇にいれると、後件に「感情表現」が生起するというのが、原因・理由を表す「テ形」接続文の一つの特徴であると結論づけられよう。

この主張の妥当性をアンケート調査で検証してみた。アンケートの回答者は55名で、27個のテ形接続文を読み、自然であれば○、不自然であれば？、間違っていると思えば×をつけるように指示した。解答を回収し、○を2ポイント、？を1ポイント、×を0ポイントとして、集計を出した。それをポイント順に並べたのが次に示す表である。

③6 文法判定アンケート

次の各文について、正しいと思ったら○、少し変だと思ったら？、全く変だと思ったら×を書き入れてください。

	○	?	×	point
7) 風邪をひいて、学校を休みました。	55	0	0	110
10) 彼が家に来てくれて、私は嬉しいです。	53	1	1	107
27) 春になって、桜の花が咲きました。	53	1	1	107
23) 靴が小さくて、足が痛いです。	48	2	5	98
24) 川の水が汚れて、魚が死にました。	48	1	6	97
18) あの部屋は静かで、よく勉強が出来ます。	46	5	4	97
19) 学生が研究室に来て、教授はコーヒーを準備した。	42	6	7	90
5) 学生が研究室に来て、教授はコーヒーを入れなければならなくなった。	39	11	5	89
2) 靴が小さくて、足が痛みます。	39	9	7	87

17) 雨が降って、道が滑ります。	40	6	9	86
8) わたしは、今朝、朝寝坊をして、タクシーで来ました。	34	11	10	79
28) 昨日は雨が降って、どこへも行きませんでした。	34	6	15	74
15) 彼に家に来てもらって、私は嬉しいです。	29	13	13	71
20) お金を貯めていなくて、旅行できません。	29	13	13	71
21) 風邪をひいて、学校を休みます。	30	10	15	70
3) 彼が家に来て、私は嬉しいです。	27	12	16	66
22) 雨が降って、道が滑りました。	28	9	18	65
4) 学生が研究室に来て、教授はコーヒーを入れなければならなかった。	20	23	12	63
9) 人に来られて、勉強が出来ませんでした。	21	13	21	55
1) 川の水が汚れて、魚が死にます。	17	13	25	47
13) タイから母が来て、あなたとデート出来ません。	15	14	26	44
14) 今日は雨が降っていて、どこへも行きません。	14	15	26	43
16) テレビの音が小さくて大きくしました。	11	12	32	34
26) ここにお金を入れて、切符が出ました。	9	13	33	31
25) テレビの音が小さくて大きくします。	9	10	36	28
12) このボタンを押して、ベルが鳴りました。	5	10	40	20
11) 今日は雨が降って、どこへも行きません。	2	12	41	16
6) 宿題をして、外出できません。	0	3	52	3

このアンケートの結果でも、後件に意志性の高い述語が生起する文は、文法的適格性を欠くと判断された。また前件に動作性の高い述語が生起する場合も、非文だと判断されている。

では、後件にまず焦点を当てて、いくつかの文を考察してみる。

○ ? × point

23) 靴が小さくて、足が痛いです。	48	2	5	98
2) 靴が小さくて、足が痛みます。	39	9	7	87

この対においては、後件に形容詞が来る方が、動詞が来るよりも自然であるという判断がなされた。感覚形容詞である「痛い」のほうが動詞「痛む」よりも感情を表す度合いが大きいからではないだろうか。

○ ? × point

5) 学生が研究室に来て、教授はコーヒーを入れなければならなくなった。 39 11 5 89

4) 学生が研究室に来て、教授はコーヒーを入れなければならなかった。 20 23 12 63

このペアでは「入れなければならなくなった」と「入れなければならなかった」という表現の違いが自然さの違いに反映しているのであろう。前者の方が、「入れなければならぬ羽目になった」という読み解釈されやすく、それだけ感情表現の度合いが高くなると考えられる。

ただし、次の文の適格性の高さは、「過去に於ける2つの事態の継起」という読みで解釈されることにあると考える。

○ ? × point

19) 学生が研究室に来て、教授はコーヒーを準備した。 42 6 7 90

「学校を休む」という表現に関しては、「やむを得ず休む」という感情を表す読みが可能であるため、適格であると判断されたのであろう。

○ ? × point

7) 風邪をひいて、学校を休みました。 55 0 0 110

21) 風邪をひいて、学校を休みます。 30 10 15 70

前者は過去の2つの事態の継起という読みも可能である。しかし、「やむを得ず」という読みを欠く文は非文となる。

(37) *風邪をひいて、学校を休んでください／休みましょう。

前件の動作性ということに関しても、興味深いデータが得られた。

○ ? × point

10) 彼が家に来てくれて、私は嬉しいです。 53 1 1 107

15) 彼に家に来てもらって、私は嬉しいです。 29 13 13 71

3) 彼が家に来て、私は嬉しいです。 27 12 16 66

「来てくれる」「来てもらう」「来る」という3つの中では「～てくれる」がもっとも動作性が低いと判断されたのであろう。「～てもらう」の場合は「～てもらおう」という意向形が可能なので、意志性が感じられるのである。

5. 結語

本稿で主張したのは以下の3点である。

- 1) 原因・理由を表す「テ形」接続文の前件には、動作性の高い動詞は現れない。
- 2) 後件には、感情を表す述語が現れる。
- 3) 一見して、これらの反例に見えるような文は、本来は「順次動作」を示すテ形接続文に分類される。

従って、

(38) 高くて買えません。

のような文が典型的な原因・理由を表す「テ形」接続文ということになる。

(39) 彼は驚いて、とびあがった。

(40) 手紙を読んで、安心しました。⁴⁾

などは副次的に原因・理由の読みが出来るけれども、2つの動作、事態の継起であると考えられる。両者とも現在形に出来ないのも、感情表現の性質が欠けているからであろう。

注：

1) 小林賢次(1992)には次のような方言差に関する記述がある。大きく西日本語方言では原因・理由を芦原巢表現形式が固定していて、共通語の「ノデ」と「カラ」とに対応するような使い分けは、一般に存在しないのである。

つまり、「から」系統の「さかい」「さけ」等がもっぱら使用されるのである。

2) 「*」は文法的的確性を欠く文を示す。「?」は不自然な文を示す。

3) 程度を表す副詞と共起させれば適格文となる。

静かで、とてもよく寝られます。

4) 「彼が来てくれて、安心だ」などと比較してみると、比較すると動作性の高さが感じられる。

参考文献：

Brown, Delmoer M. 編 (1987) An Introduction to Advanced Spoken Japanese, アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター

今尾ゆきこ (1991) 「カラ、ノデ、タメ」、『日本語学』Vol.10 No.12 明

治書院 pp78-89

内田万里子 (1999) 「「から」と「ので」」『日本語・日本文化研究』 6、京都外国語大学留学生別科 pp14-27

上林洋二 (1992) 「理由を表す接続詞補稿」『東海大学紀要』 12、東海大学留学生センター、pp23-27

許夏玲 (1997) 「文末の「カラ」について」『ことばの科学』 10、名古屋大学言語文化部 pp23-86

国広哲弥 (1992) 「「のだ」から「のに」・「ので」、カッケンブッシュ寛子他編『日本語研究と日本語教育』名古屋大学出版会 pp17-34

小林賢次 (1992) 「原因・理由を表す接続助詞」『日本語学』 Vol.11 5月臨時増刊号、明治書院 pp131-141

滝井洋子 (1998) 「原因・理由の「て」形接続についての一考察」『日本語・日本文化』 24、大阪外国語大学 pp81-93

田野村忠温 (1993) 「「のだ」の機能」『日本語学』 Vol.12 No.10、明治書院、pp34-42

富田隆行 (1993) 「原因・理由を表す「て」について」、『東京大学留学生センター紀要』 3、pp49-58

成田徹男 (1983) 「動詞の「て」形の副詞的用法」渡辺実編『副用語の研究』明治書院 pp137-158

西尾寅弥 (1993) 「喜び・楽しみのことば」『日本語学』 Vol12 No.1、明治書院 pp14-22

前田富祺 (1993) 「日本語の感情を表すことば」、『日本語学』 Vol12 No.1、明治書院 pp4-13

KARA, NODE, TE

Conjunctions which express cause or reason in Japanese

YAMASHITA, Yoshitaka

This article examines the use of *KARA*, *NODE* and *TE* which express reason or cause in Japanese. Many scholars have researched the difference between *KARA* and *NODE* and have concluded that the use of one expression or the other depends on the degree of courtesy of the speech.

As for the use of the *TE* expressing reason or cause, there has been only limited research. In this study I examine the properties of clauses connected by the *TE* form. The clause which proceeds the causal *TE* form should have a stative predicate. The clause which follows should express the speaker's feeling. Not only feeling adjectives but also other predicates which express the feeling of the speaker, including negative potential forms, can occur in the second clause.

Finally I examine the results of a questionnaire concerning the use of the causal *TE* form. The sample was made up of 55 Japanese native speakers. The data from this questionnaire supports the hypothesis proposed.